



# 中国社会学学会社会福祉研究専門委員会 第 11 回年次大会報告

都築 光一（東北福祉大学）

この度中国社会学学会社会福祉研究専門委員会第 11 回年次大会において、「災害と福祉」をテーマに報告をしたので、その概要を報告する。

開催地の中山大學は、中国広州市に立地している。広州市は人口が約 14,000 千人の都市で、北京・上海に次ぐ中国第三の都市である。香港に隣接している。古くは南越国の首都となった歴史もあり、華南地方の中心都市として発展してきた。東京スカイツリーができる前までは、東洋一と言われた「広州タワー」のある都市である。会場の中山大學は学生数 50,000 人の国立大学で、中国国内では高位にランクされる名門大学である。学生は全寮制で生活に必要な物品等はすべて確保可能となっているところから、広大なキャンパスはさながら人口 50,000 人の都市といった感がある。孫文ゆかりの大学としても知られている。宿泊施設もキャンパス内に整備されており、報告者も宿泊した。

大会の日程は、2019 年 11 月 9 日からであったが、その前日に目的地に到着し、国際学術交流促進委員の東京医科歯科大学包敏教授とともに、中国の胡会長や劉実行委員長をはじめ、関係者から歓迎を受け晩さん会が開催されたので出席した。9 日に開会式が挙行され、金子会長をはじめ、日中韓三カ国の会長講演のほか、シカゴ大学のマーク・コートニー教授や中国の主要な研究者の特別講演があった。中でも中国の研究者の講演では、都市と農村や社会的地位などに起因する格差問題が話題の中心となっており、その解決のために政府の強いリーダーシップを期待する報告が目立った。

大会初日の夕刻の晩さん会の後、日中韓三カ国会長会議が開催され、同席した。中国側の司会で進行がなされ、①協定を継続すること ②来年の韓国大会の際に協定の調印式を行うこと ③内容を現在のままにするかどうかは今後協議する という三点で話し合いがまとまった。

大会二日目は、国際フォーラムのほか、大会企画の講演が連続して開催された。報告者の報告も、国際フォーラムにおいてなされることとなっていた。依頼されていた内容と違っていたため多少面食らったものの、包教授の同時通訳にて予定していた講演内容を概ね報告することができた。ここで報告者は、災害福祉の基本的な考え方を示したうえで、東日本大震災や最近の災害の実例を検証するかたちで報告を行った。マーク教授が高い関心を寄せていたほか、韓国の会長からも興味深い報告との反応があった。この後閉会式に臨み、翌日予定どおり帰国した。

大会開催期間中は好天にも恵まれ、華南地方の明るく温暖な気候も手伝い、若々しい活気あふれる雰囲気の大大会であった。国内の社会問題をどのように認識し、どのように取り組んでいくのかといった点に関し、中国なりの模索がなされている点に関して、あらためて認識できた機会となった。また若手の研究者が比較的自由に生き生きと研究に取り組んでおり、新しい学問分野に意欲的に取り組んでいる姿が印象的であった。

